女子大國文　第百六十四号　平成三十一年一月三十一日

# 京都女子大学図書館所蔵『方丈記』慶安五年写本

## ――もう一つの名古屋本――

中前正志

京都女子大学図書館が所蔵する計二十三点の『方丈記』伝本については、拙稿「京都女子大学図書館所蔵『方丈記』伝本略目録稿　付 吉沢本（長享本）影印および『元亨』『文亀二年』本奥書写本翻刻」（拙編『東山中世文学論纂』私家版、平26、以下「略目録稿」）に概要を示しておいた。小稿は、それら二十三点のうち②慶安五年写本（914.42/A6 0085105 11-2）を翻刻して、基本的性格などにつき若干の考察を行おうとするものである（「②」は、略目録稿に付した番号）。その②について、略目録稿には、次の通り記しておいた。

袋綴（朝鮮綴）一冊。縦二六・二×横一九・八㎝。表紙以外全二〇丁（うち前遊紙一丁）。柿色無地表紙。楮紙。外題「方丈記全」（左上題簽に墨書）。内題「鴨長明方丈記」。一面一〇行。漢字交り平仮名文。流布本系本文（後掲奥書の記す扶桑拾葉集所収本か）と校合したイ本注記や振り仮名が全面的に見られる。墨付九丁表までは朱の訂正・注記も見られる。「抑一期の月影」以下の本文を、二、三字下げて書く。「月影は」歌なし。奥書「慶安五季辰八月

吉辰書之（墨付十九枚 文政七年申十一月以扶桑拾葉写本校）」。右奥書の後に、陽刻朱正方印「賓／南」（戸川浜雄）、陽刻朱長方印「緑漪書屋」、陽刻朱円印「堀田治郎」。前遊紙裏に長明の系譜あり、その後に「昭和廿七年六月十五日／新宮春三君ヨリ贈ラル／緑漪書屋ハ新宮書屋也［陽刻朱長方印「賓南／過眼」（戸川浜雄）］」。内題前後に、陽刻朱楕円印「残花書屋」（戸川浜雄）、陽刻朱正方印「緑漪／書屋」、不明陽刻朱長方印。後表紙見返しに貼付された紙片に、墨書「新宮君筆［陽刻朱長方印「賓南／過眼」］」、次にペン書「堀田治郎／元名古屋にて呉服店の／御主人／子孫村上姓 現住京都／京都にて第一回売立品の／うちに／ありしもの。／堀田治郎氏は／住吉神社神官／小田清雄の門人。」。小田清雄（？～一八九四）は、堺出身の国学者・国文学者で、『国文全書』を編纂した。本文は名古屋図書館本に極めて近く、「高倉院御時丁酉八月四日改元治承」といった同本に少なからず存する傍記もほとんどそのまま見られる。

②慶安五年写本は、略本でなく広本であり、その広本のうちでも古本系のものであるのだが、右引略目録稿の末尾にも述べた通り、同じ古本系の名古屋本（名古屋図書館本）に極めて近い本文を有している。そのことが、②についての最も注目すべき点ということになる。そこで、後掲翻刻（【②慶安五年写『方丈記』翻刻】）のあとに、必ずしも厳密なものではないが、名古屋本との校異を掲げておいた（【②慶安五年写『方丈記』と名古屋本との校異一覧】）。

抽出した約二百二十箇所に及ぶ相違点のうちの75％以上は、2よとみ（淀み）といった漢字と仮名の相違（2は②の行番号、その下が②の本文、括弧内は対応する名古屋本の本文、以下同）、4内に（内ニ）といった表記のあり方の相違、32風にたえす（風にたへす）といった仮名遣いの相違、37いくそはくぞ（いくそはくそ）といった濁点の有無の相違、45六条（六條）といった宛てられる漢字の相違、68奉りて（奉て）といった送り仮名の相違など、語そのものの有無や相違あるいは語順の相違に関わってくることのない、そういう意味で特には問題にならないものであり、約5％は、102御貢物（御□物）のように、虫損等のため名古屋本の本文が欠如しているのを校異として拾い上げてお

いたものである。さらに、46それ中（その中）の場合、「能」の草体から生じた、②の方の誤写と認められるだろうし（②にはそうした誤写や誤字がかなり見られる）、371やみぬ（やといて）の場合も、②の本文「やみぬ」の方が、次行の「両三道（返）を申てやみぬ」に引きずられて生じた誤写であるに違いなかろう。そうした、前後の文意が通じなくなるような明らかで単純な誤字・誤写による相違が、10％以上を占めてもいる。これら事例を除いて残る、対立する本文として問題になる可能性を持ったものは、僅かに10％にも満たないということになる。除外後のそれら少数の校異のみを取り出せば、

A 5代（代々） B 6まことかと（まことゝ） C 52木葉風（木葉の風） D 58うつり行て（うつり○て） E 76鞍をのみ（鞍○のみ） F 85瀬も（瀬に） G 139くたきけるなり（くたける也） H 226かり（□くり） I 241置てけり（置けり） J 266耳に（耳を） K 283かへさ（かへるさ） L 300聞ゆる（聞ゆ） M 312馬車（馬牛） N 320すへて糸竹（絲竹） O 327ありく（あるく） P 330是よく（よく）

となろうか。これらの中にも、単純な誤字・誤写によるものやそれに近いもので、特に問題にならないものが、相当数含まれているかもしれず、それらを除くとさらに数は減る。また、数量が少ないだけでなく、HやN以外は一文字の有無あるいは相違に過ぎないし、HやNの相違も決して大きなものではなくむしろ微細であって、相違の度合も随分と小さい。

あるいは、名古屋本には、

a 2オ五 或は花しほみて、露なをきえす●といへとも、ゆふへをまつ事なし。（●ニ「きえす」脱カ）

b 9ウ八 ゑきれいうち続そひて、まさるまさにあとかたなし。（傍点部「さま」カ）

c 13ウ七 やう〳〵まとひに成て（傍点部「ほ」カ）

d 15ウ七 人をたのめは、身他のあるとなる（傍点部「有」ノ誤読カ）

e 17ウ八 うちをほひ●ふきて（●ニ「を」脱カ）

f 18オ八 その西に堞（ヲ）○し、其西にあか棚を作れり（網掛部衍カ）

g 19ウ五 みつからやすみ、身つからをこたる●さまたすくる人もなく（●ニ「に」脱カ　傍点部衍カ）

といった誤脱のあることが指摘されているが（簗瀬一雄「方丈記伝本考三」〈同氏著作集二『鴨長明研究』加藤中道館、昭55〉。なお、例えば「2オ五」は二丁表の五行目で、右引箇所の冒頭部の所在位置を示す）、これら全て、②にも同じく見られる。a については後掲翻刻17〜18行目、b は同121〜122行目、c は同175〜176行目、d は同203行目、e は同232行目、f は同239行目、g は同256〜257行目、各々参照。

さらに、名古屋本には特徴的な傍記が、

イ 2ウ二 さりし安元三年四月廿八日かとよ（高倉院御時〈丁／酉〉八月四日改元治承）

ロ 4オ四 又治承四年卯月十二日の比（高倉院御時五年〈辛／丑〉八月改元養和）

ハ 8ウ三 又養和の比かとよ（八十一代安徳天皇御宇）

ニ 11ウ六 仁和寺の隆暁法印といふ人（慈尊院大蔵卿）

ホ 12ウ二 崇徳院の御在位の御時（七十五代）

ヘ 12ウ六 又、同し比かとよ（建久元年七月九日イ）

ト 14オ四 昔斉衡の比とかや（五十五代文徳御宇）

チ 27ウ七 干時建暦の二とせ（八十四代順徳）

と見えるが、略目録稿にも述べた通り、これらもやはり皆、本文と同筆かと見られる筆跡で②にも存する。イについては後掲翻刻21〜22行目、ロは同43〜44行目、ハは同104〜105行目、ニは同147〜148行目、ホは同157〜158行目、ヘは同160行目、トは同179〜180行目、チは同372〜373行目、各々参照。また、それら以外にも、②には複数の手になる種々の書込みが存するが（後述）、その中でやはり本文と同筆と見られる傍記のうち、

40 数千人（十イ）　93 手振（条里イ）　136 に（丹）　202 財（宝イ）　203 他のある（者イ）　246 おりこと（折）・つきひわ（続）　277 はつかし（羽束師）　305 かうな（蛾）　306 みさこ（雎鳩）

も、名古屋本に同じく出てくる。

以上、ここに改めて確認してきた通り、②は名古屋本と極めて近い本文を有しているのである。

ところで、名古屋本と極めて近い本文を有するものに氏孝本のあることが知られ、後出『原形本方丈記』において両者が対校されてもいる。名古屋本と極めて近い本文を持った②は、したがって、その氏孝本とも極めて近くなっている（氏孝本の本文については、碧冲洞叢書所収翻刻に拠りつつ『広本略本方丈記総索引』所載本文も参照した）。ただ、三者の主要校異を末尾に掲げたが（【②慶長五年写『方丈記』と名古屋本・氏孝本との主要校異一覧】）、そのうち、名古屋本と氏孝本が一致していて②が異なる場合が(1)(2)(7)(9)(16)（「き」有無）(22)(23)(24)(25)(26)(27)(29)(32)の13例であるのに対して、名古屋本と②が一致していて氏孝本が異なる場合はより多く、(3)(4)(5)(6)(8)(10)(11)(12)(13)(14)(15)(16)（「と」有無）(18)(19)(21)(28)(30)(33)の18例に及んでいる。しかも、後者の方には、前者に比して目に付く大きな相違が、(19)をはじめとして少なからず見られる。また、名古屋本の誤脱が指摘されている先掲a～gは、先に確認した通り②ではいずれも名古屋本と全く同じになっていたが、氏孝本ではbが名古屋本と異なっている（(15)に相当）。そして、名古屋本に見られる特徴的な傍記イ～チは、先述通り②にもすべて同じく存するが、氏孝本には全く見られない。その他、先に挙げた、②と名古屋本とに共通して出てくる傍記も、「に」（丹）「おりこと（折琴）・つきひわ（続蛾雎鳩）」「かうな」「みさこ」以外、氏孝本には見られない。すなわち、②と名古屋本、氏孝本の三本は極めて近い本文を有しているのだが、それらの中でも②と名古屋本とは格別に近くなっているのである。

②慶安五年写本の、先に確認してきた名古屋本との近さは、名古屋本との近さが知られていた氏孝本と比しても格別なのであって、もはや近いというレベルを超え、両者ほとんど同文と言っていいくらいのものであろう。両本の密接な関係が想定されなければなるまい。漢字と仮名の相違なども含めた相違が多く見られるから、一方が他方を親本

とした転写本であるという直接関係こそ否定されるものの、両本は、祖本を同じくする全く同一の系統の伝本であること、疑いない。名古屋本がもう一本出現したと言ってもよかろう。②慶安五年写本とか名古屋本とかいう個別の伝本と区別して、両者に共通する系統のテキストを、「名古屋本」系統本と称するならば、②の出現は、そうした「名古屋本」系統本の江戸前期頃における普及あるいは拡がりを窺わせるものでもある、ということになるだろう。

そもそも名古屋本は市立名古屋図書館に所蔵されていた写本で、その識語から、大野默也所蔵の慶長七年（一六〇二）写本を紫田景浩が書写して与えたものに、名古屋の国学者鈴木朖が寛政三年（一七九一）、板本と校合を加えたものであると知られ、また、識語の末尾部に「……紫シテ傍ニシルス」とあるのに紫色の注記がどこにも見られないことから、鈴木朖が校合を加えた本そのものというのではなくて、その転写本であると考えられている（以上、名古屋本について、鈴木知太郎「方丈記諸本解説」（『方丈記』武蔵野書院、昭49重版）など参照）。その後、名古屋本は戦災のため焼失した。が、幸いなことに、小川寿一編『原形本方丈記』（鴨長明学会、昭14）・碧冲洞叢書（簗瀬一雄、昭38）・青木伶子編『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院、昭40）に、小川氏・簗瀬氏・川瀬一馬氏が焼失前に影写されたものに基づく本文が掲載されている（例えば『広本略本方丈記総索引』は、「戦災で焼失した名古屋図書館本は当然採らぬ予定であつた。しかしこの書は従来、方丈記の本文研究に於て極めて重視され来つたものであり、川瀬一馬博士の御好意により、博士の影鈔せられたものを拝借する事が出来たので、些か考へ直し、採用する事とした」と述べる、26頁）。しかし、それら三者の間にも、細部において本文の相違が見られる（小稿では、『原形本方丈記』収載影写本を軸としつつ、他本をも参照した）。結局のところ、現在目にし得る名古屋本は、慶長七年以降にも、柴田景浩による転写、鈴木朖校合以降の転写、右三氏各々による転写と、少なくとも三度の転写を経ていることになる。

右の通り、名古屋本が、慶長七年（一六〇二）に遡りはするものの、その後に転写を繰り返しているものであるの

に対して、名古屋本と全く同じ系統の新出伝本である②は、慶長七年より下りはするが、まさに慶安五年（一六五二）時点の写本と認め得るものである。「名古屋本」系統本の本文は、両伝本を対比しつつ見定める必要があるだろう。

と言っても、先述通り、両伝本の本文は極めて近くて、問題となる本文の対立は、微細なものがごくわずかしか見られない。それでも、先に挙げたA～PのうちHの226かり（□くり）の場合など、②の「かり」と名古屋本の恐らくは「つくり」とで本文が対立している点、注意されるところであって、「名古屋本」系統本の本文としては両方の可能性を視野に入れておく必要があろう。大福光寺本など『広本略本方丈記総索引』の取り上げる計十七本の諸本も冷泉家本もいずれも「つくり」であって、「つく」が「可」の草体と見誤られたところから「かり」という本文が生じたものかと推測されよう。それでも、名古屋本「つくり」の方が「名古屋本」系統本の本来の本文だとは限るまい。実際、名古屋本と近い面のある細川家永青文庫所蔵慶長十年幽斎自筆本でも慶長三年幽斎校合本の転写本と見られる京都女子大学図書館所蔵③「細川友済」本でも「かり」となっているのであって（拙稿「京都女子大学図書館所蔵『細川友済』本『方丈記』―慶長三年幽斎校合本の転写本―」〈『国文論藻』17、平30〉参照。なお、同拙稿では、②の持つ意味が充分に把握できておらず、その点の微調整が必要である）、「名古屋本」系統本の本来の本文が、名古屋本の「つくり」でなく②の「かり」の方であった可能性は、充分に考えられるところだろう。また、B 6まことかと（まことゝ）や、N 320すへて糸竹（絲竹）、P 330是よく（よく）の場合も、名古屋本の方の誤脱であって、②の本文の方が「名古屋本」系統本の本来の本文である、という可能性を考慮に入れておかねばならないであろう。

あるいは、名古屋本の誤脱がすでに指摘されている先掲a～gは、従来は、名古屋本の転写過程で生じた後発のものと考えることもできたところであろうが、それらが全く同じく見られる同系統の②の出現により、名古屋本にとって、さらには「名古屋本」系統本にとって、より本来的なものであったことが確認できることにもなる。同様に、名

古屋本の先掲傍記イ～チについても、やはり②に同じく存するところから、名古屋本の転写過程で加わった後発のものなどではなくて、より本来的なものであると確認し得るだろう。

このように、もう一つの名古屋本とも言うべき②慶安五年写本の出現は、「名古屋本」系統本の江戸前期における拡がりを窺わせるものであるとともに、同系統本の本文を見定めるうえで一定の意味を持つことなのである。

なお、先にも触れた通り、②には、複数の手になる書込みが多く存する。それらのうち、本文とは別筆と見られる異本注記の大部分については、奥書の末尾に「文政七年申十一月以扶桑拾葉写本校」と記されるから、『扶桑拾葉集』所収本によって文政七年（一八二四）に加えられたものと見られる。例えば、「11朝に生れ」の「生れ」に対して、「イ死し」と注記があり、さらにその「し」の右に「にイ」と注記されている。『扶桑拾葉集』所収本の該当箇所には、「あしたに死し」とある。ここに見られる、「生れ」とは異なる二種の本文「死し」と「死に」をともに、異本本文として注記したのに違いあるまい。また、②には、流布本系だけに二箇所存するまとまった独自本文が、天部余白に書き込まれているが、それも、『扶桑拾葉集』所収本に基づくものと推量される。さらに、これも略目録稿に触れた通り、②には途中まで朱の書込みが見られる。例えば、「104養和の比かとよ」の「かと」に対して「とかイ」と墨書傍記されている、その上から朱線が引かれてそれが抹消され、さらに「カト」と朱筆で傍記されている。『扶桑拾葉集』所収本の該当箇所に「養和の比かとよ」とあるから、同本に注記された異本本文が墨書傍記されたあとに朱筆が加えられたものに違いあるまい。そうした事例から窺えるように、朱の書込みは、文政七年に『扶桑拾葉集』所収本によって校合がなされて以降のものと推測される。そこで、『扶桑拾葉集』所収本に拠ったことがほぼ明らかな異本注記と朱の書込みは、文政七年あるいはそれ以降の後世的なものであるので、煩雑を避けて、今回の翻刻では割愛することにした。逆に、ほぼ明らかなものに限っているので、今回の翻刻に残したものの中にも文政七年以降のものが含まれている可

能性がある、ということでもある。その他、後世的な不明書込みを省略した場合もある。

## 【②慶安五年写『方丈記』翻刻】

・基本的に通行字体に改めるとともに、私に句読点等を施した。また、割注は〈／〉の形で示した。

・行末を／で示し、各行頭に行番号を付した。また、半丁ごとの末尾に、」（1オ）などと記した。

・『扶桑拾葉集』所収本によって加えられたことがほぼ明らかな異本注記および朱の書込みなどは、割愛した（右本文参照）。

・傍記のうち、本文と同筆と見られるものは、〔　〕に入れた。

1行川の流はたえすして、しかも、本の水にあらす。／2よとみにうかふうたかたは、かつきえ、かつむすひて、久し／3くとゝまる事なし。世中に或人栖も、又かくの／4ことし。玉敷の宮古の内に、棟をならへ、甍を／5あらそへる、高きいやしき人のすまゐは、代を経て／6つきせぬ物なれと、是をまことかとたつぬれは、／7むかし有し家はまれなりとこたへぬ。或は去年／8焼〔破れイ〕て今年造れり。或は大家（アル）はほろひて小家と／9なる。すむ人も是おなし。所もかはらす、人もおほ」（1オ）10かれと、古へ（イニシヘニ）見し人は、二三年〔十〕人か中にわつかに独／11ふたりなり。朝に生れ夕に死ぬる習ひ、たゝ水の／12泡にそ似たりける。しらす、生れ死ぬる人、いつかた／13より来（キタリ）て、いつかたへかさる。又しらす、かりのやとり、／14誰かためにか心をなやまし、何（ナニ）によりてか目をよろ／15こはしむる。そのあるしと栖と、無常をあらそふさま、／16いはゝ朝かほの露にことならす。或は露おちて、花／17のこれり。残るといへとも、朝日にかれぬ。或は花しほ／18みて、露なをきえすといへとも、夕をまつ事なし。予、／19物の心をしれりしより以来、よそちあまりの春」（1ウ）20秋を送るあひたに、世のふしきを見る事、やゝ／21たひ〳〵になりぬ。〔高倉院御時〔子／酉〕〕さりし安元三年四月廿八日〔八月四日改元治承〕／22かとよ、風はけしく吹て、しつかならさりし夜、戌時（ノ）／23はかりに、宮古の東南より火出来て、

西北にいたる。／24はては、朱雀門・大極・大学寮・民部省なとまて／25うつりて、一夜の内に塵灰となりにき。火本は、／26樋口冨小路とかや。病人をやとせるかり屋より／27出来にけるとなむ。吹まよふ風にとかくうつり／28ゆく程に、扇をひろけたるかことく、末ひろこり／29に成ぬ。又、とをき家は煙にむせひ、ちかきあたり」（2オ）30はひたすらほのほを地に吹つけたり。空に灰を／31吹たてぬれは、火のひかりに映して、ありねく紅な／32る中に、風にたえす吹きられたるほのほ、飛かこと／33くにして二三町をこふつうつりゆく。その中の人、／34うつゝの心あらんや。或は煙にむせひてたふれ、或は／35炎にまくれて忽に死ぬ。或は身一からうして／36のかるれとも、資財を執出るにをよはす。七珍万／37宝さなから灰燼と成にき。其費いくそはくぞ。／38此度、公卿の家十六やけたり。まして、そのほかはかそへ／39しるすに及はす。すへて宮古の内、三分か一に及へり」（2ウ）40とそ。男女死ぬる者数千人、馬牛の類、辺際も／41しらす。人のいとなみ皆をろかなる中に、さしもあ／42やうき京中の家をつくるとて、宝をついやし、心／43を悩す事は、すくれてあちきなくそ侍るへき。又、／44治承四年卯月十二日の比、中御門京極のほとりより、／45大なる飄発て、六条わたりまていかめしく吹事／46侍りき。三四町をかけて吹まくる間に、それ中に／47籠れる家とも、大なるもちいさきも、一として破／48さるはなし。さなからひらにたふれたるも有、け／49た・柱はかり残れるも有、又、門の上を吹はなちて、四」（3オ）50五町かほるにをき、又、垣を吹払て、隣とひとつに／51なせり。況乎、家の内の資財、数をつくして空に／52あかり、檜皮・葺板のたくひ、冬の木葉風に乱るゝ／53かことし。塵を煙のことくに吹たてぬれは、すへて目／54も見えす、おひたゝしくなりとよむ音に、物いふこゑ／55も聞えす。かの地獄の業の風なりとも、かはかりに／56こそとそ覚えし。家の損亡するのみにあらす、是／57をとりつくろふ間に、身をそこなひてかたはつける者、／58数をしらす。此風、ひつしさるのかたにうつり行て、／59おほくの人のなけきをなせり。辻風は常に吹」（3ウ）60ものなれと、かゝる事やある。たゝ事にあらす、さる／61へき物

京都女子大学図書館所蔵『方丈記』慶安五年写本

のさとしかなとそうたかひ侍し。又、治承四年／62のみな月の比、俄に都移り侍き。いと思のほかなり／63し事なり。大かた、此京のはしめをきけは、嵯峨天／64皇の御時、都をさたまりにけるより後、既に四／65百余歳を経たる事なるに、故なくてたやすく／66もあらたまるへくもあらねは、是を世の人やす／67からすうれへあへるさま、ことはりにもすきたり。され／68とも、かくいふかひなくて、御門よりはしめ奉りて、大／69臣・公卿皆悉うつり給ぬ。世に仕るほとの人、誰かは」（4オ）70ひとり旧里に残りおらん。つるを・位に思るをかけ、／71主君のかけをたのむほどの人は、一日なりともとく／72うつらむとはけみあへり。時をうしなひ、世にあまたれ（さ）／73て、期する所なき者は、うれへなからもとゝまりけり。軒／74をあらそひし人のすまゐ、日をへつゝあれ行。家は／75こほちて淀河にうかへ、地は目の前に畠となる。／76人の心もみなあらたまりて、たゝ馬・鞍をのみ／77をもくす。牛・車を用とする人なし。西南海の所／78領をねかひて、東北国の庄園をこのます。その時を／79のつから事のたよりありて、摂津国いまの京」（4ウ）80にいたる（れ）り。所のありさまを見るに、その地、ほとせ／81はくて、條里をわるにたらす。北は山にそひて／82高く、南は海近くしてくたれり。波の音常に／83かまひすしく、塩風ことにはけし。内裏は山の中／84なれは、かの木丸殿もかくやと、中〳〵さまかはりて、／85いうなるかたも侍りき。日々にこほちて川も瀬も／86はこひくたすの家は、いつくに作れるにかあらん。な／87をむなしき地はおほく、つくれる屋はすくなし。／88古京はすてに荒果、新都はいまたならす。あり／89としある人は、みな浮雲のおもひをなせり。本より」（5オ）90この所におる者は、地をうしなひて愁へ、今うつり／91すむ人は、土木のわつらひある事をなけく。道のほ／92とりを見れは、車にのるへき人は馬に乗り、衣冠・布衣／93なるへきはおほく直垂を着たり。都の手振忽に（条里イ）／94あらたまりて、たゝひるひたるものゝふにことならす。／95世の乱る（ミタルヽ）瑞相と書をけるもしるく、日をへつゝ世／96間（ナカ）うきたちて、人の心もおさまらす、民のうれへつ／97ゐにむなしからさりけれは、同年の冬、なを此京に／98帰り給にき。されと、壊渡（コボチ）せし家と

もは、いかゝ成に／99けるにか、悉（コトく）もとのやうにしも作（イナシ）らす。伝聞、古しへ」（5ウ）100のかしこき御代には、あはれひをもて国を治め給ふ。／101則、御殿（ミトノ）に萱を葺て、軒をたにもとゝのへす。煙／102のともしきを見給ふ時は、かきりある御貢物（ミツキ）をさへゆ／103るされき。是、民をめくみ世をたすけ給によりて也。／104今の世の有様、昔になすらへてしりぬへし。又、養／105和の比（〔八十一代安徳天皇御宇〕）かとよ、久しく成て、たしかにも覚えす。／106二年か間、世中飢饉して、浅ましき事侍き。或は／107春・夏日てり、或は秋大風・洪水など、よからぬ事とも／108打つゝきて、五穀悉（シ）みのらす。むなしく春耕、／109夏うふるいとなみのみありて、秋苅、冬おさむる」（6オ）110そめきはなし。是によりて、国々の民、或は家を／111わすれて山に住、或は地を捨てさかひを出ぬ。さま〳〵の／112御祈はしまりて、なへてならぬ法ともをこなはるれ／113とも、さらにそのしるしもなし。都の習ひ、何わさにつ／114けても、みなもとは田舎をこそたれめるに、たえて／115のほるものなれは、さのみやはみさほもつくりあへん、／116ねんしわひつゝ、さま〳〵のたから物かたはしより捨る／117かことくすれとも、更に目見たつる人なし。たま〳〵かふる／118物は、金を軽くし、粟をおもくす。乞食道のほとりに／119おほく、愁へかなしむ声耳にみてり。前の歳は、かくの」（6ウ）120ことくからうして暮ぬ。明る年は、たちなをるへ／121きかと思ふ程に、剰（アマサヘ）るきれいうち続そひて、まさる／122まさにあとかたなし。世の人みなやみ死ぬれは、日を／123へつゝ、きはまり行さま、小水の魚のたとへにかなへ／124り。はては、笠打き、あしひき裏（〔裏歟〕）たるものとも、見／125くるしき姿して、ひたすら家ことにこひありく。／126かくわひしれたるもの、ありくかと見れは、則たふれ／127ふしぬ。又、築地（ツイヒチ）のつら、道のほとりに飢死ぬる者／128のたくひ、かすをしらす。取捨るわさもしらねは、／129くさき風世界にみち〳〵て、替り行かたちあり」（7オ）130さま、目もあてられぬ事おほかりき。況乎（イハンヤ）、河原な／131とには（イナシ）、馬・車の行ちかふ道たにもなし。あやしき／132しつ山かつのもちからつきて、薪さへともしく成行（ユケ）は、／133たのむかたなき人は、みつから家を壊（コボチ）て、市に出て／134うるに、一人かもて出ぬるあたひ、猶一日か命を

さ／135さふるにたに及はすとそ。あやしき事は、かゝる薪／136の中に、あかきに〔丹〕つき、黄箔なと所〳〵に見ゆる木、／137あひましはれり。是をたつぬれは、すへき方なき者、古／138き堂にいたりて、仏をぬすみ、堂の物の具を破り取／139て、わりくたきけるなり。濁悪の世にしも生れあひて、」（7ウ）140かゝる心うきわさをなん見侍し。又、いと哀なる事／141も侍き。さりかたき妻子なと持たる者は、その志ま／142さりてふかき者は、先立て死ぬ。其故は、我身を
は次（ツギ）／143にして、人をいたはしく思ふ程に、たま〳〵得たる食／144物をも、先かれにゆつるによりて也。されは（イさるは）、親
子ある／145者は、さたまれる事にて（イあ）、親そ先に立ける。又、母か命／146つきたるをしらすして、いとけなき子のなを
ちをす／147いつゝふせるなともありけり。〔慈円院大蔵卿〕仁和寺の隆暁法／148印といふ人、かくしつゝ数しらす死ぬる事をかなし／
149ひて、聖（ヒシリ）あまたかたらひて、其かうへの見ゆること」（8オ）150に、額に阿字を書て、縁をむすはしむるわさを／151
なんせられける。其人数をしらむとて、四五両月か程／152かそへたりけれは、京の中、一条よりは南、九條よりは／
153北、京極よりは西、朱雀よりは東の道のほとりなる／154かしら、すへて四万二千三百あまりなん有ける。況（イハン）／155
乎（ヤ）、其前後に死ぬる者もおほく、又、河原・白川・西京／156もろ〳〵の辺地なるを加へていはゝ、際限もある／157へ
からす。いかに況乎、七道諸国をや。〔七十五代〕崇徳院の御／158在位の時、長承（トキ）の比とかや、かゝるためし有けると／159きけと、
その世の有様はしらす。まのあたり見る、いと」（8ウ）160めつらかなりし事也。又、〔建久元年七月九日イ〕同し比かとよ、おひたゝし／161
く（イも）大なゐふる事侍りき。その有様、尋常（ヨノツネ）ならす。山は／162くつれて川をうつみ、海はかたふきて陸地をひたせり。／
163土さけて水わき出、巌（イハホ）われて谷にまろひ入。渚／164漕舟は浪にたゝよひ、道行駒は足のたてとを／165まとはせり。
都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、／166一としてまたからす。或はくつれ、或はたふれぬ。／167塵灰立のほりて、
さかりなる煙のことし。地の動／168き、家の破る音は（イナシ）、いかつちにことならす。屋の内に／169おれは、忽にひしけな
んとす。はしり出れは、地われ」（9オ）170さく。はねなけれは、空をも飛へからす。竜ならは／171や雲にものほらん。

をそれの中におそるへかりけるは、／172たゝ地震なりけりとそ覚え侍し。かくおひたゝ／173しくふれる事は、しはしにてやみにしかとも、その名／174残屐（シヘく）たえすして、よのつねに驚ほとのなゐ、二／175三十度ふらぬ日はなし。十日廿日過にしかは、やう／176〳〵まとひ（ほイ）に成て、或は四五度、二三度、若は一日／177ませ、二三日に一度なと、大方、その余波は三月は／178かりや侍けん。四大種の中に、水・火・風は常に害を／179なせとも、大地にいたりては、ことなる変をなさす。昔、」（9ウ）180〔五十五代文徳御宇〕斉衡（サイカウ）の比とかや、大なゐふりて、東大寺の仏のみ／181ぐし落なとして、いみしき事とも侍けれと、猶／182此度にはしかすとそ（そ）。すなはち、人皆あちきなき／183事をのへて、いさゝか心のにこりもうすらけりと／184見えしかとも、月日かさなり年越にしのちは、／185ことの葉にかけていひ出る人たにもなし。都て、／186世中のありにくゝ、我身と栖とのはかなくあたな／187るさま、又、かくのことし。いはんや、所により身のほとに／188したかひて、心をなやます事は、あけてかそふへ／189からす。若、をのか身、数ならすして、権門のかたはら」（10オ）190にをる者は、ふかくよろこふ事はあれとも、大にた／191のしむにあたはす。なけき切なる時も、声をあけて／192なくことなし。進退やすからす、たちゐにつけて／193をそれをのゝくさま、すゝめの鷹の巣にちかつくか／194ことし。若、貧くして、富る家の隣にをる者は、朝／195夕のすほきすかたを恥て、へつらひつゝ出入も、妻／196子・童僕のうらやめる様（サマ）を見るにも、富家の／197人のなひかしろなる気色を見るにも、心は念々に／198うこきて、時として安からす。若、せはき地にをれは、／199ちかき炎上ある時、その災をのかるゝ事なし。若、辺」（10ウ）200地にあれは、往反のわつらひおほく、盗賊の難は／201なはたし。又、勢ひある者は貪欲ふかく、独身（ヒトリ）なる／202者（者）は人にかろしめらる。〔宇イ〕財あれはをそれおほく、貧／203しけれは恨切なり。人をたれめは、身他のあるとなり、／204〔者イ〕人をはくゝめは、心恩愛につかはる。世にしたかへは身／205くるし、したかはねは狂せるに似たり。いつれの所を／206しめ、いかなるわさをしてか、しはしも此身をやとし、／207玉ゆらも心をやすむへき。わか身、父方の祖母の家／208を伝て、ひさしく

かの所にすむ。其後、縁かけ身／209をとろへて、しのふかた〳〵しけかりしかとも、つゐ」（11オ）210に跡とゝむる事を得す。みそちあまりにして、さら／211に我心か一の菴をむすふ。是をありしすまゐに／212なすらふるに、十分か一也。たゝ居屋計をかまへて、／213はか〳〵しくはし屋を造るに及はす。わつかに／214築地をつけりといへとも、門をたつるたつきなし。竹／215を柱として、車をやとせり。雪ふり風吹ことに、あやう／216からすしもあらす。所は河原ちかけれは、水の難も／217ふかく、白波のをそれもさはかし。すへて、あられぬ／218世をねんしすくしつゝ、心をなやませる事、三十／219余年也。その間、おり〳〵のたかひめに、をのつからみしかき」（11ウ）220運をさとりぬ。則、いそちの春をむかへて、家を出て／221世をそむけり。本より妻子なけれは、捨かたきよす／222かもなし。身に官禄あらす。何につけてか執を／223とゝめん。むなしく大原山の雲にふして、又、五かへり／224の春秋をへにける。こゝに、六そちの露消かたに／225及て、更に末葉のやとりをむすへる事有。いはゝ、／226旅人の一夜の宿をかり、老たる蚕のまゆをいと／227なむかことし。是を中比の栖になすらふれは、又百分か／228一にたに及はす。とかくいふ程に、齢は年〳〵にた／229かく、栖はおり〳〵にせはし。其家のありさま、よの」（12オ）230つねならす。広さはわつかに方丈、高さは七見（尺か）か内也。／231所を思定めさるか故に、地をしめて作らす。土居を／232くみ、うちをほひふきて、つきめことにかけかねをかけ／233たり。若、心に叶ぬ事あらは、安く外にうつさんか／234ためなり。そのあらため作る（イは）時、いくはくのわつらひ／235かある。つむ所、わつかに二輌也。車の力をむくふ／236るほか、更に他の用途いらす。今、日野山の奥／237に跡をかくして後、東に三尺余（アマリ）の廂をさして、／238柴折くふるよすかとす。南に竹のすのこをしき、／239その西に堞（垣か）をし、其西に閼伽棚を作れり。北によ」（12ウ）240せて障子をへたてゝ、阿弥陀の絵像を安置し、／241そはに普賢をかけ、前に法花経を置（ヒ）てけり。ひ／242むかしのきはにわらひのほとろを敷て、夜の床／243とす。西面に竹のつり棚をかまへて、黒き皮籠／244三合を置り。則、和哥・管絃・往生要集ことき抄／245物を入たり。かたはらに

琴・琵琶をの〳〵一張を／246たつ。いはゆるおりこと（折）・つきひわ（琴）、これなり。かりの菴ㇾ／247の有様、かくのことし。其所のさまをいはゝ、南にかけひ／248あり。岩をたゝみ、水をためたり。林、軒にちかけれは、妻／249木をひろふにともしからす。名を外山といふ。正木の」（13オ）250かつら、跡を埋め（続）り。谷しけゝれと、西晴たり。観念／251のたより、なきにしもあらす。春は、藤波を見る。紫／252雲のことくにして、西方に匂ふ。夏は、郭公を聞。かたらふ／253ことに死出の山路をちきる。秋は、日くらしの声、耳に／254みてり。空蟬の世をかなしむかと聞。冬は、雪をあはれ／255む。つもり消るさま、罪障にたとへつへし。若、念仏／256物うく、読経まめならぬ時（トキ）は、みつからやすみ、身つ／257からをこたる、さまたすぐる人もなく、はつへき／258人もなし。ことさらに無言をせされとも、独をれは、／259口業をおさめつへし。必禁（必か）戒をまもるとしも」（13ウ）260なけれとも、境界なけれは、何につけてか破らん。／261若は跡のしら浪に此身をよするあしたには、岡の／262屋に行かふ舟を詠て、満誓沙弥か風情をぬすみ、／263もし、桂（ヒ）の風、葉をならす夕には、潯陽の江を想／264像て、源都督のをこなひをならふ。若、余興あれは、屢／265松の響に秋風楽をたくへ、水の音に流泉の曲（イと）／266をあやつる。芸は是つたなけれとも、人の耳に悦はし／267めむとにもあらす。独しらへ、独詠して、身つから情／268をやしなふはかりなり。又、麓にひとつの柴の菴ㇾ有。／269則、比山守かをる所也。かしこに少童あり。時〳〵」（14オ）270来りて、あひとふらふ。もし、つれ〳〵なる時（トキ）は、是を／271友として遊行す。かれは十歳、我は六そち。其／272齢ことのほかなれと、心を慰むる事、是多（同）し。或は／273つはなをぬき、いはなしをとり、又、ぬかごをもり、芹／274をつむ。或はすそわの田井におりて、おちぼをひ（ヒ）／275ろひて、ほくみをつくる。若、日うらゝかなれは、峯に／276よちのほりて、遥に故郷の空をのそみ、木幡／277山・伏見の里・鳥羽・はつかし（羽束師）を見る。勝地はぬしなけ／278れは、心を慰むるにさはりなし。あゆむにわつらひなく、／279心さし遠くいたる時は、是より嶺つゝきにすみ」（14ウ）280山をこえ、かさとりを過て、或はいはまにまうて、或／281は石山をおかむ。若は又、あはつ

の原をわけつゝ、蝉哥／282の翁か跡をとふらひ、田上川をわたりて、猿丸まうち／283君かはかをたつぬ。かへさには、折につけつゝ、桜を折、／284紅葉をもとめ、蕨をおり、木のみをひろひて、且は／285仏に奉り、且家つとにす。若、夜しつかなれは、窓の／286月に古人をしのひ、猿の声に袖をうるほす。草／287むらの蛍は、遠きまきのしまの篝火にまかひ、暁／288の雨は、をのつから木葉ふく嵐に似たり。山鳥の／289ほろ〳〵とまとをに鳴を聞ては、父か母かとうたかひ、」（15オ）290嶺のかせ（イ風木）きのちかく馴たるにつけても、世の遠さ（に）か／291る程をしる。或は埋火をかきおこして、老の寝覚の／292友とす。おそろしき山ならねと（イぬは）、梟の声をあはれ（ヒ）／293ふにつけても、山中の景気、おりにつけつゝ尽事（ツクル）／294なし。況乎、ふかく思ひ、ふかくしられん人のためには、／295是にしもかきるへからす。大方、この所にすみ初／296し時（トキ）は、白地と思ひしかとも、今既に五とせを経た／297り。かりの菴も、やゝ古屋と成て、軒にくち葉ふ／298かく、土居に苔むせり。をのつから事のたよりに／299都を聞は、此山に籠居て後、やむことなき人の」（15ウ）300かくれ給へるもあまた聞ゆる（ヒ）。まして、その数なら／301ぬたくひ、つくして是をしるへからす。たひ〳〵の炎／302上にほろひたる家、又、いくそはくそ。たゝ、かりの／303庵のみのとけくして、をそれなし。程せはしといへとも、／304夜ルふす床あり、ひるゐる座（雖鳴）あり。身ひとつをや／305とすに不足なし。かうなはちいさき貝（戟）をこのむ。是、／306身をしるによりてなり。みさこはあら磯にゐる。則、／307人をおそるゝか故也。我又、かくのことし。身をしり世を／308しれゝば、ねかはす、わじらす。たゝ、しつかなるをの／309そみとし、愁へなきをたのしひとす。都て、世の」（16オ）310人の栖をつくるならひ、必しも身のためにはせす。／311或は妻子・眷属のために作り、或は親昵・朋友／312のためにつくり、或は主君・師匠をよひ財宝・馬／313車のためにさへ是をつくる。我今、身のためにむす／314へり。人のためにつくらす。ゆへいかにとなれは、今／315の世のありさま、この身のはて、伴ふへき人もなく、／316たのむへきやつこ（たな）もりし（ヒ）。たとひひろくつくれり／317とも、誰をかやとし、誰をかすへん。それ、人の友たる／318ものは、冨

るをたうとみ、ねんころなるをさきとす。／319かならすしも情あるとすなをなるとをは愛せす。」（16ウ）320たゝ、すへて糸竹・花月（イナシ）を友とせんにはしかす。／321人のやつこたる者は、賞翫甚しく、恩顧あつき／322を先とす。さらに、はくらみあはれふといへとも、やす／323くしつかなるをはねかはす。たゝ、我身を奴婢となす／324にはしかす。いかゝわか身を奴婢とするとならは、若／325すへき事あれは、則をのか身をつかふ。たゆから／326すしもあらねと、人をしたかへ、人をかへりみるより／327はやすし。若ありくへき事あれは、身つから／328あゆむ。くるしといへとも、馬・鞍・牛・車と心をなやます／329にはしかす。今、一身をわけて二の用をなす。手の」（17オ）330やつこ、足の乗物なり、是よく我心にかなへり。心身（イ心 又身心）の／331くるしきをしれは、くるしき時はやすめ、まめなれは／332つかふ。つかふとても、たひ〳〵すくさす。ものうしとても、／333心をうこかす事なし。いかにいはんや、常にあつき、／334つねにはたらくは、是、養性成へし。なんそい／335たつらにやすみをらん。人をくるしめ、人をなやます／336は、又罪業（業）也。いかゝ他の力をかるへき。衣食の／337たくひ、又おなし。藤の衣、あさのふすま、うるにした（イさ）／338かひて肌をかくす。野辺のつはな、嶺の菓（コノミ）、わつかに／339命をつく計也。人にましはらされは、姿をはつる」（17ウ）340悔（クヤミ）もなし。かてともしけれは、おろそかなれと哺／341をあまくす。すへて、かやうのたのしひ、冨る人に対／342していふにはあらす。たゝ、我身ひとつにとりて、／343むかしと今とをなすらふるはかり也。それ、三界はたゝ／344心一（ヒトツ）也。心もしやすからすは、象馬・七珍もよしなく、宮／345殿・楼閣も望なし。今、さひしき住居、一間の庵り、／346身つから是を愛す。をのつから都に出て、身の乞／347骸になれる事を思へとも、かへりてこゝにをる時（トキ）は、／348他の俗塵に着（チヤク）する事を憐ふ。若、人このいへる／349事をうたかはゝ、魚と鳥とのありさまを見よ。」（18オ）350魚は水にあかず。魚にあらされは、その心をしらす。／351鳥は林をねかふ。鳥にあらされは、其心をしらす。／352閑居の気味も又おなし。すますして誰かさとらん。／353（一行空白）／354抑、一期の月影かたふきて、余算山の／355端に近し。忽に三途の闇にむかはん／356

時（トキ）、いつれのわさをかかこたんとする。仏の／357人を教給ふ趣は、事にふれて執心なかれ／358となり。今、草庵を愛するも咎とす。／359閑寂（シンカ）に着（チヤク）するもさはりなるへし。いかゝよし」（18ウ）360なき楽をのへて、むなしくあたら時を／361過さむ。閑なる暁、此理（コトワリ）をおもひつゞけて、／362身つから心に問ていはく、世をのかれて／363山林にましはるは、心をおさめて道をおこ／364なはんかため也。しかあるを、汝、姿は聖（ヒジリ）にて、／365心はにこりにしめり。すみかは則、浄名（イ静）／366居士の跡をけかせりといへとも、たもつ／367所は、わつかに周利槃特か行にたに／368も及はす。若是、貧賤の報の身つから／369なやますか、将又、妄心のいたりて狂せる」（19オ）370か。其時、心更に答る事なし。たゝ、かた／371はらに舌根をやみぬ。不浄の阿弥陀仏／372両三道（返）を申てやみぬ。于時、建暦の二（八十四代順徳院）と／373せ、やよひのつこもり比、桑門蓮胤、外山／374の菴にして是をしるす。／（二行空白）／墨付十九枚／慶安五年辰八月吉辰書之（文政七年申十一月以扶桑拾葉写本校）

## 【②慶安五年写『方丈記』と名古屋本との校異一覧】

・②慶安五年写本の本文を行番号とともに掲げ、その下の（　）内に対応する名古屋本の本文を載せた。

・漢字と仮名の相違や仮名遣いの相違、濁点の有無の相違なども、校異として挙げた。ただし、振り仮名や異本注記の有無・相違は、校異に取り上げなかった。

2よとみ（淀み）　2久しく（ひさしく）　4内に（内ニ）　4棟（むね）　5代（代々）　5経て（へて）　6まことかと（まことゝ）　7有（あり）　7なり（也）　10見し（みし）　10独（ひとり）　11なり（也）　11習ひ（ならひ）　14何（なに）　16露（つゆ）　17残る（のこる）　18夕（ゆふへ）　21たひ〳〵（度〳〵）　24大極（大極殿）　26かり屋（かりや）　29煙（けふり）　30灰（はい）　32風にたえす（風にたへす）　33こふつ（こえつゝ）　37いくそはくぞ（いくそはくそ）　38此度（この度）　41皆（みな）　45六条（六條）　46それ中（その中）　48有（あり）　49はかり（ばかり）　49残れる（のこれる）　49有（あり）　50ほる（ほ

か）52あかり（あがり）52木葉風（木葉の風）52乱るゝ（みたるゝ）54見えす（みへす）54こゑ（声）56覚え（おほえ）58数（かず）58此風（この風）58ひつし（ひつじ）58うつり行て（うつり○行て）62移り（うつり）63なり（也）64都を（都と）65経たる（へたる）68奉りて（奉て）70残り（のこり）70つるを（つかさ）70思る（思）72うつらむ（うつらん）75前（まへ）76鞍をのみ（鞍○ヲのみ）77をもくす（おもくす）78庄園（庄薗）81條里（条里）82海近く（うみちかく）83塩風（しほ風）85瀬も（瀬に）88荒果（あれはて）92乗り（のり）99古しへ（いにしへ）101萱（かや）101葺て（ふきて）102御貢物（御□物）103給（給ふ）104有様（ありさま）105久しく（ひさしく）106浅ましき（浅猿）108耕（耕し）111住（すみ）113何（なに）114たれめる（たのめる）120からうして（かゝらして）120年（歳）121程（ほと）121剰（あまつさへ）124裏（裏）129替り（かはり）134ささふる（さゝふる）138破り（やふり）139くたきけるなり（くたける也）140見侍し（み侍し）146ち（乳）151其（その）151人数（人かす）154有ける（ありける）155其（その）156加へて（くはへて）158時（御時）158有ける（ありける）164足（あし）168屋の内に（屋の○内に）172なりけり（也けり）172覚え（覚へ）177余波（名残）180みぐし（みくし）181猶（なを）184見え（□え）192たちゐ（たちい）194をる（おる）195へつらひ（へつらい）196童僕（僮僕）197なひかしろなる（ないかしろなる）198時として（時と○して）203切なり（切也）203たれめは（たのめは）203なり（なる）206此身（この身）209をとろへて（おとろへて）211我心か（我心と）212計（斗）213はし屋（よし屋）217白波（白浪）218三十（卅）222何に（なにゝ）224消かた（き□かた）225更に（さらに）225有（あり）226かり（□くり）230広さ（ひろさ）230高さ（たかさ）230七見（七尺）231定めさるか故（さためさる故）233叶ぬ（かなはぬ）234ためなり（為也）236今（いま）238折（おり）238すのこをしき（すのこ□しき）239堞をし（堞ヲ□）239閼伽棚（あか棚）239北に（□に）241法花経（法華経）241置てけり（置けり）241ひむかし（ひんかし）242夜（夜る）244和哥（和歌）246これなり（これ也）251藤波（藤なみ）252匂ふ（に□ふ）252聞（きく）257たすぐる（たすくる）257なく（なし）258独（ひとり）260何に（なにゝ）261此身（この身）262詠て（詠めて）

263 潯陽（尋陽） 264 屢（しは〳〵） 266 耳に（耳を） 267 独（ひとり） 268 なり（也） 268 有（あり） 272 慰むる（なくさむる） 272 [同]多し（おなし） 273 つはな（つはを） 273 ぬかご（ぬかこ） 274 田井（田ゐ） 274 おちぼ（おちほ） 278 慰むる（なくさむる） 279 遠く（とをく） 279 嶺（峯） 283 かへさ（かへるさ） 283 折に（おりに） 283 折（おり） 288 嵐（あらし） 289 鳴（なく） 290 嶺（峯） 290 馴たる（なれたる） 290 遠さかる（とをさかる） 291 寝覚（ね覚） 294 ため（為） 295 是（これ） 297 菴リ（菴り） 299 此山（この山） 300 聞ゆる（聞ゆ） 300 数（かす） 304 夜ル（夜る） 306 よりて（より□） 308 しれゝば（しれゝは） 308 わじらす（わしらす） 309 愁へ（うれへ） 311 ため（為） 312 馬車（馬牛） 313 ため（為） 313 是（これ） 313 身のため（身の為） 314 つくらす（作らす） 315 伴ふ（ともなふ） 317 すへん（すえん） 319 すなをなる（すなほなる） 320 すへて糸竹（絲竹） 322 はくらみ（はくゝみ） 327 ありく（あるく） 330 なり（也） 330 是よく（よく） 333 うこかす（うこか□） 333 あつき（ありき） 334 成（なる） 338 野辺（野へ） 338 嶺（峯） 339 計（斗） 350 あかず（あかす） 351 其心（その心） 355 近し（ちかし） 356 わさをか（わさを） 357 給ふ（たまふ） 358 なり（也） 361 つゞけて（つゝけて） 363 道をおこなはん（道をゝこなはむ） 364 汝（汝は） 369 将又（将亦） 371 やみぬ（やとい て）

## 【②慶安五年写『方丈記』と名古屋本・氏孝本との主要校異一覧】

・②慶安五年写本と名古屋本、氏孝本の三本について、その間の主要校異を上下対照の形で示した。

・各校異に番号を付した。また、②慶安五年写本の本文のみ行番号をともに載せた。

| | ② 慶安五年写本 | 名古屋本 | 氏孝本 |
|---|---|---|---|
| (1) | 5代を経て | 代々をへて | 代々をへて |

| | | |
|---|---|---|
| (2) | 6まことかとたつぬれは | まことゝたつぬれは |
| (3) | 16花のこれり | 花のこれり |
| (4) | 34たふれ | たふれ |
| (5) | 46三四町をかけて | 三四町をかけて |
| (6) | 48たふれたるも有 | たふれたるもあり |
| (7) | 52木葉風に乱るゝ | 木葉の風にみたるゝ |
| (8) | 61うたかひ侍し | うたかひ侍し |
| (9) | 85川も瀬もはこひくたす | 川もせにはこひくたす |
| (10) | 86はこひくたすの家 | はこひくたすの家 |
| (11) | 88ありとしある人は、みな | ありとしある人は、みな |
| (12) | 95書をけるもしるく | 書をけるもしるく |
| (13) | 113何わさにつけても | なにわさにつけても |
| (14) | 116たから物かたはしより | たから物かたはしより |
| (15) | 121まさるまさに | まさるまさに |
| (16) | 139わりくたきけるなり | わりくたける也 |
| (17) | 157崇徳院の御在位の時 | 崇徳院の御在位の御時 |
| (18) | 180斉衡の比とかや | 斉衡の比とかや |

| | |
|---|---|
| (2) | まことゝたつぬれは |
| (3) | 花のみのこれり |
| (4) | たふれふし |
| (5) | 二三町をかけて |
| (6) | たふれもあり |
| (7) | 木葉の風に乱るゝ |
| (8) | うたかひし |
| (9) | 川も瀬にはこひくたす |
| (10) | はこひくたす家 |
| (11) | ありとある人、みな |
| (12) | 書をけるもしるへ |
| (13) | なにはにつけても |
| (14) | 宝物をかたはしより |
| (15) | まさるさまに |
| (16) | わりくたけると也 |
| (17) | 崇徳院御在位の時 |
| (18) | 斉衡とかや |

| | | |
|---|---|---|
| (19) | 193 すゝめの鷹の巣に | すゝめの鷹の巣に |
| (20) | 203 他のあるとなり | 他のあるとなる |
| (21) | 211 ありしすまゐ | ありしすまゐ |
| (22) | 226 宿をかり | 宿を□くり |
| (23) | 241 置てけり | 置けり |
| (24) | 266 人の耳に悦はしめむ | 人の耳を悦はしめむ |
| (25) | 283 かへさには | かへるさには |
| (26) | 300 あまた聞ゆる | あまた聞ゆ |
| (27) | 312 財宝・馬車 | 財宝・馬牛 |
| (28) | 315 この身のはて | この身のはて |
| (29) | 320 たゝ、すへて糸竹 | たた絲竹 |
| (30) | 321 賞翫甚しく | 賞翫甚しく |
| (31) | 327 ありくへき | あるくへき |
| (32) | 330 是よく我心に | よく我心に |
| (33) | 343 たゝ心一也 | たゝ心一也 |

| | |
|---|---|
| (19) | たとへは鷹の巣に雀の |
| (20) | 他のあると也 |
| (21) | ありし世のすまゐ |
| (22) | 宿をつくり |
| (23) | 置けり |
| (24) | 人の耳を悦はしめん |
| (25) | かへるさには |
| (26) | あまた聞ゆ |
| (27) | 財宝・馬牛 |
| (28) | 我身のはて |
| (29) | たゝ絲竹 |
| (30) | 賞罰はなはたしく |
| (31) | ありくへき |
| (32) | よく我心に |
| (33) | たゝ一心也 |

（本学教授）